

ベルリン

Ejiri Susumu

江尻 進

特電



バーリン

馬
江丸 延
特電

共同通信社



【著者略歴】

江尻 進（えじり・すすむ） 1908年、福島県いわき市生まれ。東京帝国大学法科卒業後、1932年日本電報通信社入社、合併により同盟通信社に転じ、1939年から45年までベルリン支局長。戦後、共同通信社解説委員を経て、1947年日本新聞協会に出向し、編集部長、事務局長、専務理事、顧問を経て、1987年退任。現在、日独協会副会長、日本著作権協議会理事長、千代田プレスクラブ理事長、日本ジャーナリスト懇話会会長。

ベルリン特電

発行日—1995年8月10日 第1刷発行

著 者—江尻 進 © Susumu Ejiri, 1995, Printed in Japan

発行人—半田 拓司

発行所—株式会社共同通信社

〒107 東京都港区赤坂1-9-20 第16興和ビル

電話・営業部 (03) 5572-6021・編集部 (03) 5572-6016 郵便振替 00160-7-671

印刷所—大日本印刷株式会社

乱丁・落丁本は郵送料小杜負担でお取り替えいたします。

ISBN4-7641-0347-8 C0022 ※定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き禁じられています。

第一章 ヒットラーのベルリン 9

突然の内命 菅崎丸の船室で

上海租界の異様な光景 紅海を経てカイロに

花のパリ なごやかだったロンドン

ドイツ国境で ベルリンに到着

法律観念の強さ 漂う緊迫感

ドイツ語学習 やつと住居を確保

同盟ベルリン支局 厳しくなる検閲

日本への手紙第一信 ベルリンの在留邦人

第二章 ポーランド進攻 43

ナチスの宣伝工作 特派員同士の情報交換

外人記者クラブ 独ソ不可侵条約と秘密協定

親独派の大島大使 九月一日の緊急記者会見

恐慌状態のポーランド軍 ヒットラーと握手

占領直後のワルシャワ ユダヤ人圧迫

第三章 拡大する戦線 65

ヒットラーの民族観 大島大使の怒り

欧州からの「引き揚げ勧告」 北欧作戦から西部戦線へ

家族への手紙 西部工業地帯を視察

ソ連のフィンランド攻撃 加瀬参事官の呼び出し

短かった来栖大使の任期 石炭不足で震える

日本大使館での宴会

第四章 パリ占領 91

西部戦線への従軍旅行 あっけなかった西部作戦

アムステルダムでの買い物 機甲軍の威力

雲散霧消した仏戦車師団 ダンケルクとカレーに急行

いよいよパリに ドイツの占領政策

ヴィシー政府の態度 英国本土空爆の失敗

第五章 独ソ開戦前夜

III

バルカンでの正面衝突　ハンガリーからユーゴへ

エーゲ海に向かって　ヘス副総統の異常な行動

モロトフ・ヒットラー会談　「東方へ」

当分残留を覚悟　大島大使の再任

ベルリンのチャンドラ・ボース　ドイツ外務省の秘密クラブ

松岡外相のベルリン訪問　日ソ中立条約調印

妻への近況報告

第六章 宿命の対決

147

解読されていた暗号　ドイツのレストラン

戦局はドイツに不利に　戦争長期化の恐れ

独ソ開戦　バルバロッサ作戦

五日目にミンスクを攻略　キエフ攻撃

モスクワ攻囲の挫折　日米開戦とドイツ民衆の不安

低下するヒットラー支持

第七章

膠着する戦線

179

ウクライナ南部戦線 シェーファー氏の悲劇

クリストフ・ケンプ博士のこと レニングラード包囲戦

スターリングラード攻防戦 包囲されたドイツ軍

ロンメルの抜擢 北アフリカでの戦闘

枢軸軍に大きな損失

第八章

舞台裏の攻防

210

スパイ、ゾルゲの出身 アバス通信のブーケリッチ

尾崎秀実と近衛「朝飯会」 伊藤律の自白から逮捕

日独協力の実情 ドイツ海軍の失望と不満

独ソ和平の提案 ドイツ潜水艦の回航

一隻は無事呉港に到着

第九章

終局へ

236

モスクワ攻防戦 史上最大の戦車戦

レーダー提督との会見 連合軍、イタリアに上陸

激しさを増す空襲 ノルマンディー上陸

バルジ作戦 近づくベルリンの最後

リッベントロップと「お別れの会」 ヒットラー暗殺未遂事件

秘密兵器への期待

第十章 脱出劇

270

支線を縫って南下 チロル山中に

米軍駐屯 ルアーブルにて

米国送りの船中で ベッドフォードでの生活

祖国への帰還 大島大使の変身

ヒットラーの遺言 ヒットラーはなぜ敗れたか

あとがき

306

写真＝著者／共同通信社

地図＝吉田富男

装丁||菊地信義

ベルリン特電

第一章 ヒットラーのベルリン

突然の内命

ベルリン支局長の内命を受けたのは、昭和十四年（一九三九年）二月二十八日のことだった。二日の新婚旅行を終えて、初出社した日のことだから、よく覚えている。結婚式を終えたその晩に、新婚旅行に出かけねばならぬほど、当時の結婚休暇は短かった。手近な横浜で、まず一夜、翌日は伊豆山でもう一夜。三日目の朝早々に出社したら、予想もしなかった、突然の内命である。用命者は、同盟通信社専務理事として、経営一切を取り仕切っていた最高幹部の古野伊之助さんである。外信部のデスクで、山のような入電を懸命に整理していた時である。私のそばまで椅子をすり寄せ、真剣な顔つきで、話しかけてきた。低いタミ声である。

「キミ……結婚早々ですまないが、できるだけ早くベルリン支局長として、単身赴任してくれないか。若女房は、ドイツの生活に多少馴染んだころ合いの、約半年ほどを見はからって、必ず送り届けるから……」

私はショックを受けた。外信部に配置された以上、いずれ外国に出されるものと覚悟はしていたものの、出先は英語圏だろうと秘かに見当をつけていた。当時外国人から直接会話を教えらるゝのは、都心では帝国ホテル近くの並木通りの小さなビルの二、三階にあった「井上会話スクール」一校だけだった。週一回、高い月謝を払って、三、四人で円卓を囲む「上級クラス」に通っていた。一年ほどで、どうやら、多少自信がつき始めたところである。

しかし、ドイツ語となると、旧制高校の第二外国語で難しいゲーテの『ファウスト』の講読に、辞書と首っ引きで悩まされた記憶が残っているだけ。会話などとは全く縁遠い。

何でマア言葉のできぬ国へ追いやられるのかと、いささか恨めしい心境だった。

帰宅して、台湾から上京して、われわれの新宅に滞留していた父に報告したら、信義感の強い父は烈火のように怒り「お前のやったことは詐欺だ。事前にそうしたことが分かっていたら、山崎家は一人娘を嫁に出さなかつたろう。なぜ、事前にその事情を打ち明けなかつたのだ」との追及である。しかし、事前には何の示唆もない、真正正銘の出し抜けの任命である。古野さんは、われわれの結婚披露宴にも出席し、「一人娘」といった事情は、百もご承知の上の決断である。それだけに、なおさら恨めしくなった。

笹崎丸の船室で

妻の実家の「山崎佐」家では、いずれ外国へ出るだろうと覚悟はしていたものの、こう早く決

まると予想していなかったのは当然だろう。しかし新婚早々の外国への単身赴任で、その後の結婚が不調になった事例など色々聞いていたので、「ぜひとも同行してほしい」とたつての懇請である。当時の同盟海外特派員は中国以外は数少なかったが、家族同伴という者は、一人もいなかった。満州事変から戦火は中国に拡大し、国を挙げて「非常時」を自覚させるよう呼号していた時である。だから、欧州といえども特派員に出ることは、半ば従軍といった空気であった。

困惑した妻の実家の山崎家から出された窮余の案は、一応妻を欧州に同行し、パリの在仏大使館二等書記官として情報関係で活躍していた親戚の筒井潔（後のルーマニア公使）家か、山崎の母の女学校同級生のハンブルク総領事館の今井領事宅に、社の要望する半年ほど、身柄を預かってもらうということである。欧州の空気は緊迫する一方なので、着任が急がれる。岩本清外信部長（後の共同通信社専務理事）の口添えで、とにかく同行の同意が得られた。

出発を急げというので、早速丸の内の郵船本社に駆けつけて、乗船切符の予約に行ったら、一等船室は最後尾の窓が横と後ろの両面に付いている特別一等室しか残っていないと言う。船賃は一千円。当時もらっていた月給が、百円そこそこの時代であるから、千円と聞いただけで、タジタジとなった。帰社して総務部に報告したら、「それは高過ぎるから、次便にしたら」との助言である。当時郵船の欧州航路は、月二回の就航で、マルセイユまで四十三日という、一見のんびりした船旅であった。シベリア鉄道で行けば、ベルリンには二週間で到着するが、ソ連通過に不可欠なソ連政府の査証は、何カ月待っても、必ず出るという保証がない。結局船便が一番早いと

というのが当時の常識だった。それで結局、編集局の「急げ急げ」の督促に従い、三月下旬神戸出航の笠崎丸の特別一等室を予約することになった。東京から下関までは、特急列車で行って、下関で乗船することにしたら、東京、下関間の交通の手当として、郵船から二等切符が支給された。最後尾に豪華な展望車が付いている二両編成の一等車で、オドオドと落ち着かない旅をするところから早くも「洋行」生活が始まった。

ことに船便の一等ほど、二、三等との間の、格段の待遇の差を感じさせられるものはない。上甲板の食堂、図書室、回廊の甲板は一等船客だけの、完全な閉鎖空間になっていた。食堂には、指定の名札の付いた丸テーブルが散在している。船長席には、藤山樫一（後の駐英大使）、北原秀雄（後の駐仏大使）、重光晶（後の駐ソ大使）の、若い三外交官補が座っている。われわれには、一等運転士と同席する二番目のテーブルが与えられた。われわれ夫婦、新設の同盟ジュネーブ支局長として単身赴任する本田良介君、金商又一からモロッコ方面に売り込みに乗り込む小八重さん（後にその令嬢が、ホームラン王になった王貞治野球選手と結婚）という顔ぶれ。毎回横文字の長いメニューが出てくる。これに従って注文するのは、いささか煩わしいが、この料理がどんなものかが、その都度話題として賑わう。船長を囲む外交官補テーブルで、一番体格のよい北原官補は「メニューにあるものは、幾品食べてもいいですよ」とのボーイさんの回答を真に受けて、数日中に全部のメニューを重複注文し終えて、さすがに「のびた」と悲鳴をあげていた。

この元気な青年官補たちも、甲板でのデッキ・ゴルフとなると、二十歳になったばかりのわが

第1章 ヒットラーのベルリン



1939年4月 宮崎丸船上での記念撮影。後ろから2列目右から2人目が著者。前列中央の和服姿が夫人の治子さん

新妻に、片っぱしから撃破される。日本舞踊の「名取り」としての、しなやかさは見せられてはいたが、これとは対照的な運動神経の発揮ぶりには、ちよつと驚かされた。

上海租界の異様な光景

神戸から出帆した宮崎丸は、翌早晩に門司港に碇を下ろしていた。出迎いのランチで乗船して、船室を檢分したら、大きなキabin・トランクなどは、船室の荷物棚にキチンと納まっていた。甲板で待っていた見送りの三田村九大教授夫妻と、長話をする暇もなく、出帆を予告するドラが鳴り響きタラップを下りる夫妻に手を振ることになる。門司港外の六連島の姿が遠のくと、いよいよ日本を離れるという感慨が胸に迫る。これが航海というものと、一夜を明

かして翌朝、甲板に出ると、紺碧の海は濃い黄色に底深くよんでいる。黄海の沖合にきたわけである。それから一昼夜。広々とした海はますます深い黄色に変わってきたと思つたら、ここはもう揚子江を溯行しているのだと教ええられる。間もなく左折して、支流の黄浦江に入り、上海港に接岸。米の積み込みで二日停泊するというので、上陸して日本租界の小ホテルに入る。近くに日本の海兵隊の兵舎が見える。租界という、治外法権の外国領土は、英仏などで建物や街並みまで特色が見られる。

同盟支社が、その夜招いてくれた「日本料理屋」は、初めて外国で接した異様な日本の姿であつた。厚い煉瓦の壁の部屋的一方にだけ、四枚の障子を立て、木の床に、畳の代わりに簀の子を張った疑似日本間。そこに上衣を脱いで、ふしだらな姿で、ワイワイと騒ぎながらビールを飲む若い将校連である。これが、外国に侵略をし始めた、第一線の日本の姿かと、違和感を覚えた。日本租界の境のガーデン・ブリッジを渡れば、共同租界となり、取り澄ました英国風の街並みに変わる。行き交う人力車だけが、中国的点景として、異様に映る。

上海から香港の港に入る。いよいよ英国風の街並みに変わり、より濃い西洋的雰囲気を感じさせられる。

香港を出ると、ケビンまで暑くなる。後部のマストの上に、北斗七星と南十字星が同時に見えるようになる。朝メコン川の支流の狭いサイゴン川の、兩岸のベトナム農村の姿を、手に取るように見物しながら、ゆっくり溯行する。港ともいえぬサイゴン港の河岸に接岸、ここでも、また